

平成 28 年 2 月 4 日

# 南の風 171

南部ミニバスケットボール連盟  
会長 藤原 敬一

今回は、オールジャパン女子決勝の様様を書きます。

去年に続いて、JX-ENEOSサンフラワーズとデンソーアイリスの対戦となりました。JXは準決勝でシャンソンを79対52下し、デンソーは富士通を54対51で退け決勝へ進出しました。デンソーと富士通の一戦は、各ピリオドとも3点差の接戦でした。大事な場面で、富士通よりもデンソーのシュートの精度が勝り、激戦を制しました。デンソー8番高田の攻守の活躍が光りました。

決勝ではJXはオールジャパン3連覇が懸かり、デンソーは初優勝へ向けての一戦となりました。

すばり言うと、JXの強さが際立ったゲームでした。点数で見ると前半、JXーデンソー39対15（22対6、17対9）でした。後半は44対29（25対18、19対11）でした。

まずはオフェンスです。10番渡嘉敷、21番間宮のツインセンターの威力は抜群でした。渡嘉敷の凄さはポストプレー（ステップ&ターンからのシュート）のみならず、ペイントでのフェーダウェーシュート、ペイント外からのミドルショットに表れていました。またハイポストからのドリブルカットインの迫力は、相手の戦力を削ぐのに十分でした。さらにもう1つ加えるなら速攻の先頭として走ることです。あの身長（192cm）であれだけオールラウンドに動ける女子選手は、今まで日本にはいなかったです。ただ渡嘉敷1人なら何とか抑えられるのです。相手にとって厄介なのは間宮の存在です。ディフェンスの意識が渡嘉敷に向けば、間宮がすかさずゴール下のポジションを占め得点に絡みます。また特筆すべきは、献身的にリバウンドに飛び込むことです。**基本的な地道なことをしっかりやるのです。**さらにさらに、準決、決勝を通して**フリースローの確率は95%（20本中、外したのはたった1本）**でした。ミニバスや中学生にとって、お手本となるプレイを表現してくれる選手です。基本的なプレイの大切さを、身を持って教えてくれる選手です。デンソーにとって、間宮のプレイはボディブローのようにじわじわ効いてきたのではないのでしょうか。そしてこの2人を含めた4人をリードするのが、0番の吉田です。視野の広さは言うまでのなく、読み予測に基づいた瞬時の状況判断からのパスとドリブルは、他の追隨を許しません。アジアNO.1と言われる所以です。まだ膝の具合が万全ではないのですが、準決、決勝では圧巻の存在感を示しました。吉田の一番の凄さは、**ボールを持つ前からコート全体を常に把握していることです。**9+1+B+Gをどんな場面でも実践しているということです。そして機を見て自分でシュートしたり、ドリブルカットインで攻めたりします。相手にとってみたら、本当に恐るべき選手です。今紹介した3人の他に、11番の岡本、23番の大沼の3ポイントやブレイクがあります。そして吉田の控えには、スピード豊かなガード32番の宮崎もいます。さらに日本代表の52番宮澤も、3番ポジションとして存在感を示しています。こうして見ると、何処からでも得点してくるJXのオフェンスは、相手に取っては脅威的的です。JXの攻めは、3-2のアライメントから渡嘉敷、間宮をダブルポストで使うパターンと、ポストの2人を外に出し、8クロス気味のモーションオフェンスから崩すパターンがあります。そして中からボールを外に展開しての3ポイントやドライブからのカットインを狙います。それぞれの選手にシュート力があるので、得点力が安定しています。